

Adger and Ramchand(2003)の叙述構造論 (1)

鈴木 博 雄

0. はじめに

(1)のような、いわゆるコピュラ (copula) 文の機能を叙述 (predication) と等価 (equation) に二分した分析が行われることがある。Adger and Ramchand(2003) (以下, A and R(03)) は, Scottish Gaelic におけるコピュラ文の分析に基づいて, 同文の基本的な機能を叙述と仮定し, 等価構造は叙述構造より派生されるものと結論づける。

(1) a. NP + be + XP

b. ① He is young. (predication)

② Tom is this man. (equation)

本稿及び次稿において, A and R(03)の叙述に基づいたコピュラ文の分析を考察したうえで, 同論文の普遍文法への貢献の可能性について論述する。

1. Scottish Gaelic の叙述構造

本章では, A and R(03)が展開した Scottish Gaelic のコピュラ文に対する独創的な分析の概要を5つの節に分けて纏めていくことにする。

1. 1 Scottish Gaelic の基本的センテンスパターン

A and R(03: § 2)は, Scottish Gaelic の叙述構造を支えている基本的センテンスパターンはVSOで, (2)のように動詞上昇が義務的に適用されるとする。

(2) Chunnaic_i Calum [t_i Mairi].

see-PAST Calum Mairi

‘Calum saw Mairi.’

(p.328) (註)

同言語において, V が文頭に派生されるプロセスは次のように説明される。

(3) a. Dh’òl Calum an t-uisge beatha.

drink-PAST Calum the whiskey

‘Calum drank the whiskey.’

(p.329)

b. [_{TP} XP T' [T ('drank') vP [DP ('Calum') v' [v VP [YP V'
[V DP ('the whiskey')]]]]]]

(p.330(7) に準拠)

(3a)の派生過程(3b)において、dh'òl (=drank)は、Vよりvを経由してTまで繰り上がることで、EPP (extended projection principle) が満たされる。(3b)を導くにあたり、A and R(03)は(4)のような定式を想定していると考えられる。

(4) H(F_{EPP}) + H(XP)



Merge (Move or Adjoin)

(註: H(F_{EPP}) = T in (3), H(XP)=V in (3))

尚、(4)において、FはSpell-Out又はLFの時点で導入される音韻素性で、これは<interpretability> (解釈可能性)の尺度に基づいている(解釈されない場合は、[uF]と表記する)。

次に、(5)は実在的(自立的)助動詞(substantive auxiliary)がTに上昇している例である。

(5) a. Bha Calum ag òl uisge beatha.

be-PAST Calum ASP drinking whiskey

'Calum was drinking whiskey.'

b. Tha Calum faiceallach.

be-PRES Calum careful

'Calum is (being) careful.'

c. Tha Calum anns a'bhùth.

be-PRES Calum in the shop

'Calum is in the shop.'

(p.330)

A and R(03)は、(5)のような文をSA (substantive auxiliary) 構文と呼ぶ。同構文の派生プロセスは(6)のように表すことができる。

(6) a. [_{TP} XP T' [T ('be') PredP [DP ('Calum') Pred' [Pred PP/AP ('in the shop/careful')]]]] (= (5b,c))

b. [_{TP} XP T' [T ('be') PredP [DP ('Calum') Pred' [Pred [asp] VP [YP V' [V ('drinking') DP (' whiskey')]]]]]] (= (5a))

(p.331(11),(12) に準拠)

(6b)において、アスペクト素性 (aspectual property) を担っているPredは、通常のVPシェルのvに相当する(アスペクト素性と語彙的内容を持った動詞は同一のカテゴリとして扱うことができない、という理由からvの代わりにPredが用いられているのである)。ここで重要なことは、Predにおける[asp]はSpell-Outされないので、(6b)におけるPredPの構造はいわゆる小節 (small clause) と見なせる、というA and R(03: 332)の主張である。以下の用例(7)は、同論文の上の主張を補強

するものである（下線部が小節を形成しているということに留意されたい）。

- (7) a. Chunnaic mi Calum agus [e ag òl uisge beatha].
see-PAST I Calum and [him ASP drinking whiskey]
'I saw Calum while he was drinking whiskey.'
- b. Chunnaic mi Calum agus [e air a mhisg].
see-PAST I Calum and [him on his drunkenness]
'I saw Calum while he was drunk.'
- c. Chunnaic mi Calum agus [e uamhasach toilichte].
see-PAST I Calum and [him terribly happy]
'I saw Calum while he was really happy.'
- (p.332)

以上, Scottish Gaelic における基本的センテンスパターンは, 特に (7) に代表される小節構造を含んだ {V- [XP-YP]} (註: [XP-YP] は小節 (small clause)) のような構造を成しているという A and R(03)の主張を要約した。以下, 同論文における叙述構造の分析法を更に具体的に見ていく。

1. 2 Substantive Auxiliary 構文

前節でも触れたように, (8) において V が実在的 (自立的) 助動詞 (substantive auxiliary) である場合の構文を SA 構文という。

- (8) V + NP₁ + NP₂ (SA 構文)

(8) の NP₂ が単純 NP 述語 (simple NP predicate) である場合, (9) のように非文が派生されてしまう (p.332)。

- (9) a. *Tha Calum tidsear.
be-PRES Calum teacher
'Calum is a teacher.'
- b. *Chunnaic mi Calum agus [e tidsear].
see-PAST I Calum and [him teacher]
'I saw Calum while he was a teacher.'
- (p.332)

一方, (10) のように, NP₂ に前置詞の機能を有する小辞 'na (≡ (英) in) が先行し, それが主語 NP₁ とΦ素性が一致するような構文は文法的となる。

- (10) a. Tha Calum 'na tidsear.
be-PRES Calum in-3_{MS} teacher
'Calum is a teacher.'

b. Chunnaic mi Calum agus [e 'na tidsear].

see-PAST I Calum and [him in-3_{MS} teacher]

'I saw Calum while he was a teacher.'

(p.332)

(9) と (10) の文法性の違いについて、A and R(03: 333)は、NP₂ ((8)における)の明示的(外延上の)属性(denotational property)にその根拠を求める。換言すれば、(11)において、XPが①PP, AP, verbal(準動詞)の場合、NP主語には事象性(eventuality)に起因した個体の属性が明示(外延)されるのに対し、②XP_{PRED}がNP_{PRED}の場合、個体の本質(実体)がNP_{SUBJ}に明示(外延)されると考えるのである。

(11) V + NP_{SUBJ} + XP_{PRED} (SA構文)

更に、A and R(03)は、(11)のXPの解釈に語根(lexical root)を埋め込んだ関数構造(functional structure)の内部に[eventuality]を組み込む。これは、(12)のような適格性条件(felicity condition)として表現することができると考えてよい。

(12) a. If XP is {PP/AP/Verbal}, then XP is [+eventual].

b. If XP is NP, then XP is [-eventual].

Scottish GaelicのSA構文において、単純NP述語が生起しないのは、(11)のXPは常に、[+eventual]でなければならないからである(同言語においては、(12b)は存在しないということになる)。ここで、同論文は(13a)のような結論を提出し、(13b)のように、DPはいかなる手段を用いても述語化することができないことを主張する。

(13) a. In essence, all that the overt prepositional head does is semantically convert the NP into a predicate with an appropriate variable position to bind. (p.333)

b. *Tha Calum anns an tidsear.

be-PRES Calum in the teacher

'Calum is the teacher.'

(p.334)

以上、Scottish GaelicにおけるSA構文の述語特性に関し、A and R(03)のPredP及び、[eventuality]を用いた分析を紹介した。次節では、SA構文よりも更に特異な統語的振る舞いを示す構文を見ていく。

1. 3 Inverted Copula 構文

(14)のような、欠如(defective)コピュラに、{述語+主語}が後続する構文を倒置コピュラ構文(inverted copula construction: IC構文)と言う(p.334)。

(14) Defective copula + PredP + NP_{SUBJ}

(15,a,b) は、前節で扱った SA 構文に類似しているが非文であり、(15c,d) のように IC 構文である場合は文法的となることについて、A and R(03: 335)は、IC 構文の場合、述語が主語の内在的属性を叙述する（述語に対して個体的レベル (individual-level) の解釈が要請される）という理由づけをする。

- (15) a. *Is an duine sin mor.
 COP-PERS that man big
 ‘That man is big.’ (p.335)
- b. *Is an cù leamsa.
 COP-PERS the dog with-me
 ‘The dog belongs to me.’ (p.335)
- c. Is mòr an duine sin.
 COP-PERS big that man
 ‘That man is big.’ (p.334)
- d. Is le Calum an cù.
 COP-PERS with Calum the dog
 ‘The dog belongs to Calum.’ (p.335)

更に同論文は、(15)における文法性の差を [eventuality] の観点から説明することができるとする。つまり、IC 構文 (16a) における {tidsear Calum} は、コンピュータが現在時制であるため事象を形成し得ない。一方、(16b) における {thidsear Calum} はコンピュータが過去時制であるため既に Calum (NP_{SUBJ}) が生存していない場合に限り事象を形成する（「Calum は以前、教師だった」という非事象的解釈に加え、「Calum は生前、教職に従事していた」という解釈が可能になる）。

- (16) a. Is tidsear Calum.
 COP-PRES teacher Calum
 ‘Calum is a teacher.’
- b. Bu thidsear Calum.
 COP-PAST teacher Calum
 ‘Calum was a teacher.’ (p.335)

SA 構文と IC 構文の関係について、A and R(03)は、SA 構文から IC 構文が派生されるという立場をとる。SA 構文を成す (17) において、音韻的に弱形である Pred(‘COP’) は、T の位置に上昇させても、EPP を満たすことができない。そこで、Pred は XP を随伴させることにより (Pred’ 全体を Spec に上昇させることにより)、[uT] の u が削除され EPP が満たされる (p.336)。

- (17) [TP XP T’ [T PredP [DP (‘the dog’(=an cù)) Pred’ [Pred (‘cop’) YP (‘with

同論文は, (17) における Pred' の Spec,T への上昇に着目すると, SA 構文から IC 構文が派生されるという現象は Scottish Gaelic に特異なものである可能性を指摘する。尚, 同言語においても (18) のように IC 構文に DP_{PRED} は生起し得ない。

(18) a. *Is an tidsèar Calum.

COP-PRES the teacher Calum

'Calum is the teacher.'

b. *Is Calum an tidsèar.

COP-PRES Calum the teacher

'Calum is the teacher.'

(p.337)

(19a) は欠如コピュラを含む IC 構文には, AP, PP に加え, (DP_{PRED} ではなく) NP_{PRED} が節末に生起することができないことを形式化したものである。

(19) a. $[[is]] = \lambda \pi \lambda x [\text{holds}(\pi, x)]$

b. π is the semantic type of simple properties. The copula's function is to state that the property denoted by its complement holds of its specifier. The lack of any eventuality variable signifying spatiotemporal location is what results in the distinction in interpretation between the defective copula and the substantive auxiliary.

c. *Is mòr duine.

COP-PERS big a man

'A man is big.'

(p.338)

(19a) により (19c) が非文であることの理由づけが可能になるのである ((19a) は (19b) のような読み方をする)。

以上, IC 構文が SA 構文から派生される条件として, PredP が DP であってはならない, つまり NP でなければならないという A and R(03) の主張を要約した。次節では, IC 構文においても, DP_{PRED} が生起するという分析を可能にしてしまう構文を扱う。

1. 4 Augmented Copula 構文: DP_{PRED} の生起条件

(20) は一見, IC 構文の例外と思われる用例である。

(20) 'S e Calum an tidsèar.

COP-PRES AUG Calum(DP₁) the teacher(DP₂)

'Calum is the teacher.'

(p.339)

A and R(03)は、(20)のような {cop-Aug} の連続体を含む構文を AC 構文 (Augmented Copular Construction) と言う。拡張辞 (augment) の生起は Scottish Gaelic に限定されてはおらず、アイルランド語、ヘブライ語、ポーランド語、サポテク語 (Zapotec) などにも観察される (p.339)。(21)は(20)の統語構造である。

(21) [CP C TP [[T XP_i Agr] [CopP DP [Cop' [Cop_i (true equative) DP]]]]] (p.339(44)に準拠)

(21)において拡張辞 (Aug) は Agr に位置づけられ、いわば代名詞の機能を果たす。A and R(03: 343)でも示唆されているように、筆者はこの拡張辞は、英語における左方転移 (left dislocation) における代名詞 ((22)の he) に類似したものであると考える。しかし、(20)とは異なり、英語では代名詞がコピュラ及び、DP_{SUBJ} の左側に生起する。

(22) Tom, he is the teacher.

以上の差異は、英語には IC 構文が存在しないからということではなく、(21)の Cop の位置にコピュラが留まり、その代わりに、DP_{SUBJ} が Spec,T に上昇し、EPP が充足されるから、ということに起因しているものと考えべきであろう。

1. 5 Augmented Copula 構文とコピュラの等価辞性

AC 構文は、(23a)のように DP_{SUBJ} と DP_{PRED} の間に等価の関係が成立しない。したがって、(23b)のような叙述的な書き換えが必要となる。

(23) a. *'S e Cicero Tully.

COP-PRES AUG Cicero Tully

'Cicero is identical to Tully.'

(p.340)

b. 'S e Cicero agus Tully an aon duine.

COP-PRES AUG Cicero and Tully the same man

'Cicero and Tully are the same person.'

(p.341)

ところで、A and R(03)は、(24a,b)の両文の文法性の差により、AC 構文においては、DP_{PRED} に対して、目的語の解釈が可能であるからといって、両文における文法性の差は、(24a)を他動詞構文と見なすことにより説明することはできないとする。その理由は次のようになる。つまり、(24c,d)において、DP_{SUBJ} と DP_{PRED} の間に、時間副詞や話者指向の副詞が介入しても文法的となるからである。(24c,d)が他動詞構文であるならば、両文に介入している副詞が(25)の両文にも介入できるはずである。しかし、(24)と(25)は非対称的な (asymmetric) 関係にあり、(24)を他動詞構文とは見なすことはできない。

(24) a. 'S e Sean Hamlet a-nochd.

COP-PRES AUG Sean Hamlet tonight

- 'Sean is (playing) Hamlet tonight.'
- b. *'S e Hamlet Sean a-nochd.
 COP-PRES AUG Hamlet Sean tonight
 'Sean is (playing) Hamlet tonight.' (p.340)
- c. B' e Mairi an uair sin an tidsear.
 COP-PAST AUG Mairi then the teacher
 'Mary was the teacher then.'
- d. 'S e Calum gu fortanach Hamlet a-nochd.
 COP-PRES AUG Calum fortunately Hamlet tonight.
 'Calum is fortunately (playing) Hamlet tonight.' (p.341)

- (25) a. *Chunnaic Mairi an uair sin Sean.
 see-PAST Mairi then Sean.
 'Mary saw Sean then.'
- b. *Chunnaic Mairi gu fortanach Sean.
 see-PAST Mairi fortunately Sean.
 'Mary fortunately saw Sean.' (p.341)

(23a) 及び (25) に対する観察に基づき、A and R(03: 342)は、AC 構文の特異性を (26) のように纏める。

- (26) a. AC 構文におけるコピュラは等価辞ではない。
 b. AC 構文における DP_{PRED} は他動詞構文における DP_{OBJ} とは異なる。

尚、AC 構文における DP_{PRED} は現実には作業仮説形成上の便宜的な統語要素であるということについては次稿で詳述することになる。

2. Adger and Ramchand(2003) (叙述構造論) の可能性

本章では、前章で要約した A and R(03)の Scottish Gaelic についての叙述構造論が英語及び日本語の叙述構造の説明に対し、どの程度応用し得るのか、ということについて、具体例を考察しながら筆者の見解を示す。

まず、SA(Substantive Auxiliary) 構文の日本語及び、英語の対応形について。

Scottish Gaelic の SA 構文の構造 (27) において、XP は 4 種類に分類され、それが PP, AP, Verbal のいずれかの場合、これらの文法カテゴリーと NP_{SUBJ} との間に事象性が生じる。一方、XP が NP_{PRED} の場合、それは NP_{SUBJ} の本質 (実体) を明示 (外延) する。

(27) (= (11)) V + NP_{SUBJ} + XP_{PRED} (SA 構文)

(28), (29) は Scottish Gaelic の叙述構造を英語及び日本語の叙述構造と対応させたものである。

- (28) a. That man is { in the garden, awkward, running }
b. That man is Mr. Smith.
c. That man is IN a teacher. ((註) IN は PF で削除される要素とする)
- (29) a. あの男は, {庭にいる, 不器用だ, 走っている}。
b. あの男は, スミス氏である/だ。
c. あの男は, {①教師である/だ, ②教師をしている}。

(28a,b) は, Scottish Gaelic の叙述構文と平行に扱うことができるのに対し, (28c) においては英語では IN は音形化されない。それは, IN の意味が不定冠詞に吸収されているからであると考えればよい (因みに, 生成文法の用語 “IS A condition” の命名者 M. Allen は英語の不定冠詞が意味的に IN を含んでいるということを前提にしていたものと察し得る)。

(29a,b) についても, Scottish Gaelic の叙述構文と同様の扱い方をすることが可能であるが, (29c) は (28c) の場合よりもやや複雑な構造をなしている。表面上, (29b) と (29c①) の間には差異は感じられない。両者ともに, NP_{SUBJ} (あの男) の本質が NP_{PRED} によって外延されている。本稿では, 固有名詞の問題については深入りせず, 普通名詞を含む (29c) について若干の言及をしておく。(29c①) は「あの男」の一時的属性を記述しているのに対し, (29c②) は「あの男」の実体を「永遠の現在時」(eternal present time) の中に封じ込めた表現となっている。つまり, (29c②) における「教師」は抽象名詞的性質を含んでいる。このことは, (29c) の「教師」を「一教師」と置換した場合, (29c②) の容認度が落ちることとも関連しているのであるが詳述は次稿に譲る。

次に, IC (Inverted Copula) 構文の日本語及び, 英語の対応形について。

前章で言及したように, IC 構文 (30) における XP_{PRED} は NP_{SUBJ} の永続的本質を外延する。

(30) Copula + XP_{PRED} + NP_{SUBJ}

Scottish Gaelic の IC 構文に対応すると想定し得る構文として, 英語及び日本語では (31) の用例を挙げることができる。

- (31) a. An awkward person is that man.
b. 不器用な人物である/だ, あの男は。

NP_{PRED} を含む SA 構文 (32) は IC 構文 (31) と同様に, NP_{PRED} が文法的な文の形成に不利な影響は与えていない。しかし, (32) を (33) のような IC 構文と比べた場合, 後者の方が自然である (但し, (32c) のように「が」を用いると自然な文が得られる)。

- (32) a. That man is the awkward person.
b. あの男は, 例の不器用な人物である/だ。

c. あの男が、例の不器用な人物である/だ。

(33) a. The awkward person is that man.

b. 例の不器用な人物とはあの男のことである/だ。

c. 例の不器用な人物について言及するならば、それ（その言及）はあの男にあてはまる。

(33a)では、that manが新情報として文体操作されている分、また(33b)では主語不在文(subjectless sentence)（つまり、話題文）である分、Scottish GaelicのIC構文とは性質を異にする((33c)は(33b)に対して主語を含む文にパラフレーズしたものである)。しかしながら、(33a,b)よりも(32a,b)の方が無標の(unmarked)情報構造をなしているということから、英語や日本語の場合にも、Scottish GaelicのIC構文の成立条件をある程度までは適用可能であるとしてよい。ここで、NP_{PRED}に比べDP_{PRED}は情報構造の観点から、汎言語的に文末には生じづらい傾向があるのではないかという仮定が得られることになる。

3. おわりに

本稿は、A and R(03)における、Scottish Gaelicを対象とした叙述構造論の前半部分の要点を纏め、更に同論文に対する若干の論評を加えた。同論文が主張する叙述構造におけるXP_{PRED}の統語と意味のインターフェイスでの機能分類は基本的に汎言語的に適用できるものと思われるが、いくつかの問題点も残されている。それらの問題点を解決するにあたり、A and R(03)は以下の句構造を仮定する。詳細は次稿に譲る。

(34) [SDP_e SD [PDP_{<e,t>} PD [KIP_π KI... NP...]]] (p.343(65)に準拠)

[註]

本稿における（ ）付きのページ数は、Adger and Ramchand(2003)のページ数を指す。尚、用例の一部において、支障の生じない程度に若干、記号を調整した。

[主要参考文献]

- Adger, David and Gillian Ramchand 2003. Predication and equation. *Linguistic Inquiry* 34 : 325-359.
西山佑司. 2003. 『日本語名詞句の意味論と語用論—指示的名詞句と非指示的名詞句—』 東京：ひつじ書房。
Williams, Edwin 1994. Thematic structure in syntax. Cambridge, Mass.: MIT Pr.

(すずき ひろお 英語コミュニケーション学科)

正誤 「学苑」764号(2004年5月)執筆者紹介欄の鈴木博雄(執筆・編集協力)『最新和英口語辞典』

発行所「朝日新聞社」は「朝日出版社」の誤りです。

記してお詫び申し上げます。(編集室)